The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「下からの説明」を超えて : メルロ=ポンティと「ある種の史的唯物論」
Author(s)	西村, 高宏
Citation	メタフュシカ. 2004, 35, p. 115-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11506
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「下からの説明」を超えて
― メルロ＝ポンティと「ある種の史的唯物論」 ―

西村高宏

序

「要するにわれわれは、(戦争をとおして）歴史を学んだのであり、これを忘れてはならないと主張しているのだ」(SNS,265)。

モーリス・メルロ＝ポンティは、「戦争」（第二次世界大戦）の経験をとおして、「偶然的で純粋に非合理的な一要素」を内包した「歴史の信じがたいほどの力」を目の当たりにし、それまでわれわれが求めてきた「自由」、「真理」、「幸福」、そして「人間のあいだの透明な関係」などといった「１９３９年のわれわれの諸価値」(SNS,268)をあらためて「実際の歴史」のなかで「成就」させる必要がある、と言っている。

前期のメルロ＝ポンティにおいては、その作業は、「価値の秩序」が具体的な「事実の秩序」に「侵入」しており、またそれらが「不可分なものとして保持」(S,287)されているような歴史的なヒューマニズム（具体的なヒューマニズム）の現実化においてのみ達成されうる、とされる。そしてその際、何にもましてわれわれに課せられる任務は、「実際の歴史を読み取ること」(HT,57)、「歴史の知覚を獲得する」(HT,105)こと、あるいは「現在のできるかぎり忠実で完全な読解」(SNS,299)にほかならず、さらには、われわれの抱いてきた「価値」をあらためて「歴史的闘争のなかで支えていくことを任務とする人々を選びとる」(S,279)、という作業でなければならないとされる。したがってここから、前期のメルロ＝ポンティは、「人間の意志や思想」などといった「つねにあいまいさのつきまとう原理のほかに、それとは異なる別な支えを見つけだし」(S,281)、それを逞しくしていかなければならないとして、「ある種の史的唯物論」(SNS,185)あるいは「広義の史的唯物論」(MS,100)に関する解釈を自身の歴史理論の中心に据えつけようとする。メルロ＝ポンティ自身、「歴史の論理という考え方からは、その必然的な帰結としてある種の史的唯物論が生じてくる」(SNS,185)、とさえ明言している。具体的にその作業は、「１８４４年のフォイエルバッハーマルクス」からの影響や、また前期のメルロ＝ポンティ自身の「歴史の実存的把握」(PP,201)といった観点などから、きわめて〈人間主義〉的な歴史理論とし

て展開されていく。

本稿では、メルロ＝ポンティ自身によって展開される「動機づけ」の概念や、「社会的実存の歴史という単一の歴史」観(PP,200)をもとにしながら、メルロ＝ポンティが、いかなるかたちで、「経済的下部構造を唯一の原因」だとみなそうとする「下からの説明」(S,290)や「〈〔基底〕還元的〉な考え方」から「史的唯物論」を救い出し、自身における「ある種の史的唯物論」にかんする解釈を逞しくしていくのかをあきらかにする。そこでは、いわゆる「歴史の現実の主体」が「単なる経済的な主体、あるいは生産要因としての人間」(PP,200)のうちに切り縮められてしまうことなどけっしてない。それどころか、メルロ＝ポンティは、下部構造と上部構造とのあいだが「原因」と「結果」で結ばれているとする「経済による一つの因果的説明」(AD,41)を乗り越え、「史的唯物論」にかんするあらたな「説明」のすがたを提案しようとしているのである。

１　史的唯物論と「因果的思考」

科学主義的なマルクス主義は、いわゆる下部構造と上部構造との関係を「原因と結果」といった切り口から「説明」しようとする。しかしながら、そもそもこのようなかたちで「史的唯物論」を「経済史」、もしくは「経済中心の社会観」として捉え返すことなど可能なのであろうか。あるいはまた、言いかたをかえれば、「史的唯物論」もしくは「唯物史観」[1]をとおしてマルクスとエンゲルスが意図していたことは、「経済的下部構造を唯一の原因だと考える」(MS,100)ようにわれわれを促すことにあったのであろうか。メルロ＝ポンティは、このようなマルクス主義を「歴史をその経済的骨格に縮めてしまう『痩せ細ったマルクス主義』」(SNS,225)、あるいは「皮相なマルクス主義」(SNS,185)にほかならないものとして徹底して斥け、それに対して、「実存主義的な探求」に接続されることによってのみはじめて達成されうる「生きたマルクス主義」(SNS,143)を対置しようとこころみる。この「生きたマルクス主義」のうちでこそ、「史的唯物論」はマルクスとエンゲルスが抱いていたその本来的意図を獲得することができる。したがって、メルロ＝ポンティにおける「ある種の史的唯物論」解釈の可能性について考察するまえに、あらかじめ、この「史的唯物論」と「因果的思考」との関係の（不）可能性を文献学的な観点から再確認しておく必要がある。この作業のなかにおいて、すでに、メルロ＝ポンティにおける「ある種の史的唯物論」解釈の方向性が透かし見えてくる。

そもそもマルクスとエンゲルスは、下部構造と上部構造とのあいだが「原因」と「結果」によって結ばれているなどとは考えてはいなかったのではないか。というのも、「マルクス・エンゲルスが主張しているのは、旧来の史観では、政治や理念――ヘーゲルで言えば国家や絶対精神の次元――が社会の主導的契機として考えられてきたが、それはイデオロギー的顛倒であり、歴史の究極的な基底因子は物質的生活の生産・再生産の次元に存するということ、さしあたりこのことまでであって、上部構造と下部構造とのあいだに悟性的因果関係を読み込むのは誤解

[1] この「唯物史観」と「史的唯物論」といったことば遣いについては、鷲田小彌太、『唯物史観の構想』（批評社、１８９３年）、２０－４頁、あるいは６４－９頁に詳しく書かれている。

というよりもむしろ曲解である」[2]、と言えるからである。

このような解釈をその根底でささえているものは、間違いなく、「エンゲルスによるヨーゼフ・ブロッホ宛の書簡」（１８９０年９月２１日）であろう[3]。そのなかでエンゲルスは、ブロッホに向けて「経済的な契機が唯一の規定的契機」だと解するならば、それによって展開される歴史観は「抽象的で馬鹿げた空文句」にしかなりえない、と言い、むしろこれら両者の関係は「相互作用(Wechselwirkung)」として捉えられるべきである、と主張している。エンゲルスはこの「書簡」のなかで、そのことについて、具体的につぎのように言っている。

> 「唯物史観によれば、歴史における究極的な基底的契機は現実的な生の生産と再生産である。それ以上のことはマルクスも私も主張したためしがない。しかるに、もし経済的契機が唯一の規定的契機だというようにねじまげられてしまうと、先の提題は無内容な、抽象的で馬鹿げた空文句になってしまう。経済的状態は土台であるが、上層建築のさまざまな契機――階級闘争の政治的諸形態やそれの結果、つまり、勝利した階級によってその戦勝後に制定される制度や憲法など、法の諸形式や当事者たちの頭脳における現実の階級闘争の反射、政治的・法律的・哲学的な諸理論、宗教的直観とそれを教養体系にまとめあげたもの、こういったものが、歴史的闘争の途上、発展に影響を及ぼし、多くの場合、とりわけその形態を規定する。これらすべての契機の一つの相互作用なのであって、ここにおいては結局のところ、無数の偶発事を通じて、経済の運動が必然的なものとして自己を貫徹するのである。」[4]

ここには、あきらかに、法制的・政治的等の機構的諸制度ならびに宗教的・芸術的・学問的等のいわゆる精神文化的諸形態としての「上部構造」が、逆に、経済的状態もしくは「土台」としての「下部構造」に対して「反作用」の関係を拓いていることが見てとれる。すなわち、それが単純に「経済的な契機が唯一の規定的契機」だとして捉えられてはいないことは明白である。それどころか、エンゲルスは、それ以前の『反デューリング論（オイゲン・デューリング氏の科学の変革)』（１８７８年）のなかでも、すでに、「原因と結果とも、個々のケースに適用されるときにだけそのままあてはまる観念であって、個々のケースを全世界との全般的連関のなかで考察すれば､すぐに両者は結びあい､普遍的な交互作用という見かたに解消してしまう。この交互作用では、原因と結果とが絶えずその位置を換え、いま・あるいはここで結果であるものが、あそこで・あるいはつぎに原因になり、またその逆も行われるのである」[5]、として、「原因と結果」という「悟性的な因果律(Kausalität)」に対して「弁証法的な相互（交互）作用」のカテゴリーを対置していたことを忘れてはならない。このような対置の背景には、マルクス

2　廣松渉、『廣松渉著作集　第九巻』(岩波書店、１９９７年)、４３１－３頁。
3　廣松渉、『今こそマルクスを読み返す』(講談社現代新書、１９９０年)、６８－９頁。
4　Marx-Engels Werke.Bd.37.S.463.
5　フリードリヒ・エンゲルス、『反デューリング論　上』(秋間実訳、新日本出版社、２００１年)、３７頁。

とエンゲルスが「カント流の因果概念の非弁証法性」を斥けつつ、ヘーゲルから引き継いだ、いわゆる弁証法的な「因果観」や「法則観」がはたらいていることはあらためて言うまでもない[6]。

また、メルロ＝ポンティ自身も、「エンゲルスのフランツ・メーリング宛書簡」（１８９３年７月１４日）や、「エンゲルスのシュタルケンベルク宛書簡」（１８９４年）のなかの言葉を引用してみせながら、「経済」を「原因」とする「因果的思考」が「抽象的」なものでしかありえない、としてつぎのように批判している。

> 「『経済的状況が原因であり、それだけが能動的なのであって、他のすべての現象は受動的な結果でしかないというのは正確ではない』(「エンゲルスのシュタルケンベルク宛書簡」)。因果的思考は、他のすべてのばあいと同様にここでも不十分である。『原因と結果を厳密に対立する二極と見る通常の考え方』(「エンゲルスのフランツ・メーリング宛書簡」）は抽象的なのである。」(SNS,234)

しかしながらメルロ＝ポンティは、エンゲルスが、このようなかたちで一貫して弁証法的な「相互作用」論を気にかけていたということだけを理由にとって、いわゆる科学主義的なマルクス主義における「史的唯物論」の「因果的思考」を斥けることができる、などとは到底考えてはいない。なぜなら、ここで言われている「弁証法は、歴史やさらには自然について、ここに『相互作用』とか『質的な飛躍』とか『矛盾』<u>がある</u>というだけの、ある種の記述的特性の単なる確認にすぎない」(AD,95)程度のもの、という可能性がきわめて強いからである。それどころかそこでは、「歴史」と「自然」という「このふたつの領域の区別さえなされてはおらず」、「哲学」ですらも「一個の特殊科学、思考法則を研究する特殊科学」にまで貶められてしまう。そして、とくに後期のエンゲルスにいたっては、もはや「哲学」は「科学の諸成果を根源的弁証法のしかるべきところに位置づけるという権利」さえも完全に剥奪されてしまっているありさまなのである(ibid.)。したがって、科学主義的なマルクス主義は、「世界を変革するであろう行為」、すなわち、「もはや哲学と技術に分かつことのできないような実践」としての「下部構造の運動」を、たんに「橋を構築する技師の行為とおなじような技師的タイプの行為」(AD,96)にまで歪めてしまうことになる。そして前期のメルロ＝ポンティは、「実践」としての「下部構造」にかんするマルクスとエンゲルスの本来的な意図を救い出すために、「１８５０年以前のマルクス主義」――それは、「哲学」を「余分でもあれば不可能なもの」として斥けようとするものではなく、むしろ逆に「哲学を統合しようとするマルクス主義」、すなわち「生きたマルクス主義」――へとふたたびたち還っていこうとするのである。

6　廣松渉、『廣松渉著作集　第九巻』(岩波書店、１９９７年)、４３３頁参照。

２　前期メルロ＝ポンティにおける「経済」観――「人間の生産」としての「経済」

したがって、この「下部構造」としての「経済機構」の「運動」をはたしてどのようなものとして捉え返していくのか、がもっとも重要な鍵となる。

メルロ＝ポンティが、科学主義的なマルクス主義の展開する「経済」観のうちでとくに危惧しているものは、それが、下部構造としての「経済機構」から、もともとマルクスがその本来的ありかたとしてそのうちに読み込んでいた「物によって媒介された人と人との関係」が削ぎ落とされてしまい、「ほとんど完全に一つの物」にまでなりさがってしまう(ibid.)、という事態であった。そしてメルロ＝ポンティは、そのような解釈に対して、そもそもマルクスが、「物質が実践の支点および身体として、人間生活に介入してくる」(SNS,231)際のその「様式」を問題にするために導き出していた「実践的唯物論」といった観点から、あらためて、下部構造としての「経済機構」のありかたを問いなおし、下部構造と上部構造との関係を「実践」といった切り口から組みかえようとこころみるのである[7]。

きわめて一般的ではあるが、「史的唯物論（唯物史観）の公式」としては１８５９年に刊行された『経済学批判』「序文」におけるマルクスの記述[8]をあげることができる。しかしながら、より厳密なかたちでその形成過程を把握しようとするならば、その青写真はすでに、１８４６年に刊行された『ドイツ・イデオロギー』のためにエンゲルスが準備していた「基底稿(Urtext)」のなかに描かれていた、とも言える[9]。そして、さらにこの「史的唯物論（唯物史観）」が具体的なかたちで確立されていく思想的な背景のうちには、いわゆる「分業(Teilung der Arbeit)」の論理を軸としながら、マルクスとエンゲルスが『ドイツ・イデオロギー』において「『人間』の問題から『社会』の問題へと思索をすすめ」[10]ていったこと、つまりは「疎外論の地平から物象化論の地平への飛躍」[11]といった経緯を見定めることができる。そこでは、もはや「歴史の推進力」が「人間」の発展過程からのみでかたられることなどけっしてなく、むしろ、その「人間自身の行為が人間にとって疎遠な、対抗的な威力となり、人間がそれを支配するのではなく、この威力が人間を〈支配する〉圧迫する」ようになる、といった「諸個人の社会的協働関係の自然発生的な在り方」、すなわち、「社会的活動の自己膠着」が「歴史の発展過程における主要

7　ちなみに、メルロ＝ポンティは別のところで、マルクスのこの「実践」概念を「人間や自然が他人と取り結ぶ諸関係を組織化していくばあいのいろいろな作用の交錯(entrecroisement)によってひとりでに出されるその〈意味〉」(EP,69)とし捉え返すことをとおして、「経済機構」を実体化してそれを「物質（自然）の存在論」にまで仕立てあげてしまうような解釈を徹底して斥けようともしている。そして、このような作業をその背後からもっとも推し進めてくれるものこそが、前期のメルロ＝ポンティにとっては「歴史の実存的把握」にほかならない、と見なされるのである。「しばしばお祭りさわぎの種にされてきたイデオロギーと経済の関係にしても、イデオロギーが依然として『主観的』なものであり、経済が客観的過程と考えられていて、両者が全体的な歴史的実存のうちで、またこの歴史的実存を表現している人間的対象のうちで交流させられるのでないかぎり、神秘的で、前論理的で、想像もつかないものでありつづけよう」(SNS,232-3)。すなわち、前期のメルロ＝ポンティにとっては、「史的唯物論」に込められている本来的意図は、イデオロギーと経済との両者が「歴史的実存」のうちで「交流」させられることなくしては見定めることなどできないもの、として理解されることになるのである。

8　『マルクス・エンゲルス全集　第十三巻』（大月書店版）、６－７頁。

9　廣松渉、『廣松渉著作集　第九巻』（岩波書店、１９９７年）、３２５頁。

10　同上、３６０頁。

11　同上、４０７頁。

な契機」と見なされることになるのである[12]。

しかしながら、前期のメルロ＝ポンティは、この「社会の自己膠着」や「物象化」という概念を中心軸としながら自身の「史的唯物論」を展開しているわけではない。そのことには十分に気をくばっておく必要がある。前期のメルロ＝ポンティにおける「ある種の史的唯物論」解釈は、むしろ「人間の具体的な運動、実践」(SNS,138-9)、「人間の共存の体系」(SNS,229)、あるいは「相互人間的な諸関係」(PP,200)を軸に展開される。その理由としては、メルロ＝ポンティにおける「歴史の実存的把握」にも深く影響をあたえることになる、「１８４４年のフォイエルバッハ - マルクス」(『経済学・哲学草稿』[13]) における「人間」の存在規定が深くかかわっていることはあらためて言うまでもない。そこにおいてマルクスは、フォイエルバッハが、「人間」という存在を一方で「自然的・対象的・感性的存在として、すなわち苦しみを受け、制約され、制限された存在」(『草稿』、２０６頁) であると見なしておきながら、その対象的世界に対する人間の態度（対象的世界の所持）を「実践的な活動」として捉えようとはせず、逆にそれを「直観」へと訴えかけようとした、と批判している。そして、「類的本質」といえども、それがフォイエルバッハのように人間の内面的な性質（能力）にのみ限定されてはならず、逆にそのうちに、「類」としての共同を具体的に「現実化」していくような人間の外的な活動、すなわち具体的な人間による「社会的な」活動としての「労働」、あるいは、「人間の実践」などといった側面をも併せて読み込まなければならない、として「人間」の存在規定を大幅に組みかえようとするのである。

メルロ＝ポンティ自身も、このような「１８５０年以前のマルクス主義」に見受けられる〈人間主義〉的な観点にもとづきながら、自身の歴史理論をよりいっそう逞しくしていく。そしてその際に、とくにメルロ＝ポンティの「史的唯物論」観をその根底で支えていたものが、マルクスの『フォイエルバッハに関するテーゼ』(１８４５年) における「第一テーゼ」であったことはおそらく間違いはない。なぜなら、メルロ＝ポンティが、「過去のあらゆる唯物論の主要な過ちは、……そこでは、対象・現実・感性的世界が客観ないし直観の形でのみ捉えられていて、人間の具体的運動、実践としては捉えられず、主観的な仕方では捉えられていないことである」、という『フォイエルバッハに関するテーゼ』(「第一テーゼ」) を引用してみせながら、そのうちに、「歴史の要因としての主観性」の重要性をあらためて見いだし(SNS,138-9)、さきにふれた「上」と「下」との「相互作用」の本来的なすがたを抽出しようとこころみているからである。

「史的唯物論」は、「人間の具体的な運動、実践」として、すなわち「主観的な仕方」で捉えられているのでなければならない。「痩せ細ったマルクス主義」は、マルクスとエンゲルスが「史的唯物論」の視座を確立した『ドイツ・イデオロギー』のなかで、歴史の推移を「幾重にも倍化された」「人間の生産力」によって「進展」していくものとして捉えていたことを忘れている。

---

12 マルクス／エンゲルス、『新編輯　ドイツ・イデオロギー』(廣松渉編訳・小林昌人補訳、岩波文庫、２００２年)、５９－６６頁、６９－７０頁。〈　〉内は削除箇所。

13 K. マルクス、『経済学・哲学草稿』(城塚登・田中吉六訳、岩波文庫、１９６４年)。なお、マルクスの『経済学・哲学草稿』からの引用箇所については、以下『草稿、頁』として記す。

たしかに、一般的にみれば、「経済」というもののうちには生活手段の〈生産〉と〈配分〉という二つの契機を見いだすことができる。マルクスとエンゲルスにおいても、「経済」には「生産」と「流通」の二契機が見定められているが、やはり第一次的にはそれを「人間の生産」を意味するものとして捉えておく必要がある。というのも、マルクスとエンゲルスにとってはこの「人間の生産」こそが、単なる社会観の次元を超えて、人間の存在論的規定に関わる基礎的なカテゴリーにほかならないものだからである。メルロ＝ポンティ自身も、自らの〈人間主義〉をささえるものとしてマルクスの『フォイエルバッハに関するテーゼ』(「第一テーゼ」) を引きあいにだしていたように、「経済」もまた「人間の具体的運動」、「生産」、あるいは人間の「実践」として捉えられているのでなければならない、というわけなのである。

それでは、ここにおける「生産」とははたしてどのようなものとして見定められているのであろうか。あらためて言うまでもなく、それは、同じく『フォイエルバッハに関するテーゼ』(「第一テーゼ」) でも述べられているように、 第一には、「人間」による本源的な「対象的活動」[14]、すなわち「生産的な労働」[15]にほかならないと言える。メルロ＝ポンティの表現をかりて言えば、それは、「自然変革的(transnaturel)」(SNS,230) な活動あるいは「自然的歴史的状況」の「引き受け(assumer)」、ということになる。またこの「対象的活動」としての「生産」は、同時に「複数の諸個人の協働」という「社会的」なもの、すなわち「間主体的・歴史的な協働としての対象的活動」[16]であることも当然忘れてはならない。

事実マルクスとエンゲルス自身も、『ドイツ・イデオロギー』のなかで、「複数の諸個人」における間主体的な「協働」の様式として捉えられた「生産諸力」(「産業および交換」) の歴史との連関からでしか、いわゆる「『人類の歴史』は研究されえもしないだろうし、また論じられうることもないであろう」、とまで言っている[17]。したがって、このように、「間主体的・歴史的な協働としての対象的活動」といった視点から歴史を捉えようとしたことがマルクスとエンゲルスの本来的な意図であったことを思い起こすならば、「唯物史観（史的唯物論)」において想定される「歴史の現実の主体」が「単なる経済的な主体」ではないことはあきらかなことである。そして、さらにメルロ＝ポンティは、そのようなかたちで「史的唯物論」を救い出すことだけでは満足せず、まさにマルクスとエンゲルスが「史的唯物論」のうちで想定していた「歴史の主体」こそが、自身が「実存論的な歴史理解」において捉え返した「歴史の主体」にほかならないとして、最終的にそれをつぎのように言いかえようとするのである。

---

14 マルクス／エンゲルス、『新編輯　ドイツ・イデオロギー』(廣松渉編訳・小林昌人補訳、岩波文庫、２００２年)、２３０－１頁。

15 ここで言う「生産的労働」とは、実践的な投企であり、また、対象変様的かつ自己変様的な一種の創造的活動と言える。

16 廣松渉、『廣松渉著作集　第十一巻』(岩波書店、１９９７年)、４２９頁。

17 マルクス／エンゲルス、『新編輯　ドイツ・イデオロギー』(廣松渉編訳・小林昌人補訳、岩波文庫、２００２年)、５４－５頁。ちなみに、メルロ＝ポンティ自身も、『意味と無意味』のなかで、人間の「生産力がなければ、与えられた自然的諸条件の活動にしても経済やましてや経済史を出現させたりはしないだろう」(SNS,228-9)、と言っている。

「歴史の現実の主体とは、単に経済的な主体、生産要因としての人間ではなくて、もっと一般的に、生きた主体、生産性としての人間、つまり、自分の生活を形態化しようとし、愛し憎しみ、芸術作品を創ったり創らなかったり、子供をもったりもたなかったりするかぎりでの人間、なのである。」(PP,200)

これらの「人間の活動」[18]は、まさに「実存」といった切り口でこそよりあきらかにされうる。このように、「唯物史観（史的唯物論）」における「歴史の現実の主体」が「実存論」的な観点から捉え返された「生きた主体」あるいは「具体的な主体」であるとするならば、その点からも「史的唯物論」がたんなる「経済史」ではありえないことは明白となる。つまりそれは、「歴史を経済化」してみせるようなものではけっしてない。またこの「歴史の現実の主体」である「生きた主体」が、たんなる「認識論的な主観」ではないこともあらためて言うまでもない（ちなみにそこでは、「認識」ですら「実践によって底荷（パラスト）」をつけられている）。その「主体」は、「不断の弁証法によって、おのれの状況に即して思考し、おのれの経験と接触しながらそのカテゴリーを形成し、この状況やこの経験をおのれがそこに見いだす意味によって変様していく人間的な主体」である。さらにこの「主体」は、「同じような状況のうちに置かれた多くの他の意識のただなかにあり、それは対他的に存在し、そうすることによって対象化を受け、類的主体になる」(SNS,237）ところのものでもある。そして、前期のメルロ＝ポンティにおいては、最終的に、この「類的主体」を軸に展開される「社会的実存の歴史」(PP,200）こそが、自身における「ある種の史的唯物論」を「説明」してくれるものにほかならない、と見なされることになるのである。「史的唯物論は、ひたすら経済だけを追う因果論ではない。むしろ、歴史ならびに思考様式をば、生産ならびに労働様式の上にではなく、もっと一般的に、存在および共存の様式の上に、相互人間的諸関係の上に基づけようとするものなのである」(PP,200)。

３　「上」と「下」とを繋ぐもの――互いを「動機づけ」合う関係性

とかく「客観的な過程」として考えられがちな「経済」でさえも、それがあらためて「相互人間的諸関係」のうちで、すなわち、「生きた主体」もしくは「具体的な主体」が拓く「社会的実存の歴史」のうちで捉え返されるのでなければ、それは、歴史のうちでなんらかの「意味」をもつことすらできない、とメルロ＝ポンティは言う。とはいえ、ここでの「具体的な主体」（「生きた主体」）が、すぐさま、マルクスが『ドイツ・イデオロギー』のなかで展開させた「現実的な諸個人」とまったく同一のものなのか、という問いは当然起こりうる。まさにこの問題こそが、「メルロ＝ポンティが行おうとするマルクス読解について批判されるべき点」にほかな

[18] メルロ＝ポンティは、これらの「人間の活動」を、『ドイツ・イデオロギー』から引用して、「人間が『日々彼らの生をつくり直す(refondre)』」活動と言い換えていた。当然のことながらそれは、「われわれがそれを内側から生きる」ことによってしか「歴史」を獲得することはできないという、メルロ＝ポンティ自身の「生きられる歴史」観（「実存的な歴史理解」）を考慮してのことである。

らない、とも言える。

いわゆる「『知覚の現象学』で問題になっていた『世界』」は、かならずしも、即座にそれが「変革されたり生産されたりする世界」、すなわち「生産と労働の領域」と同一のものとは言えないのではないのか。もしかりにそうでないとするならば、「『住まうこと』や素朴に『出会うこと』の世界としての自然的世界というこのような考え方が、生産の領域についてのマルクスの分析と生産関係としての社会関係という定義のなかにどうして再発見される可能性がありえようか。まさにこれこそが、疑いもなくメルロ＝ポンティが行おうとするマルクス読解について批判されるべき点である。･･･メルロ＝ポンティにとって実存という語が意味しているのは、主観性は受肉していなければならず、世界のなかに拘束されているものとして考えられなければならないということだけではなく、主観性は決定論には屈服しないし、この意味で私たちが出発しなければならないのはまさに主観性からであって客観的状況からではないということもまた意味しているのである。『外部の何ものかが私を規定＝限定（この語の二重の意味で）しうるためには、私は一個の物でなければならないであろう』(PP,496)。したがって、起点としての主観性を断念するのではなく、『歴史の神秘』(SNS,195）が内面性と外面性という古典的二者択一を超出させる受肉ないし表現の神秘と同じものであるということを理解しなければならないのである」[19]。

そして、まさにこの「内面性と外面性とを繋ぐもの」として、メルロ＝ポンティが、別のところで「動機づけ」という概念を密かに注入していたことを見逃すわけにはいかない。メルロ＝ポンティは、さきにふれた「相互人間的諸関係」のうちでの〈捉え返し〉を、別のところで「自覚化 (la prise de conscience)」(PP,199）として捉え返し、「歴史の横糸」のなかに「動機づけ」[20]というより人間的な営為を導入しようとしているのである。

「史的唯物論にあって歴史の土台とされている経済は、古典的な科学におけるような客観的諸現象の閉じた円環ではなく、むしろ生産諸力と生産諸形態との一つの対決であり、しかもその対決がその終極に達するのは、生産諸力がその無名性を脱して己れ自身を自覚し、かくして未来を形態化することができるようになったときだけだ、とされているのである。ところで、この自覚化とはあきらかに一つの文化的現象であって、これによって歴史の横糸のなかに、あらゆる心理学的動機づけが導入されることができるわけだ」(PP,199)。

この心理学的な「動機づけ」概念を「導入」する「自覚化」を、メルロ＝ポンティは別のと

---

19 Cf. Sichère, Bernard., *Merleau-Ponty ou le corps de la philosophie*. (Paris : Éditions Grasset & Fasquelle,1982) p.121-2.

20 現象学における〈動機づけ〉概念は、これまで批判されてきたような自然主義的な「因果性」とはまったく異なった概念である。なぜならば、〈動機づけ〉とは、構成される志向的世界の連関のなかにのみ所属するものなのであり、またその世界のなかでのみその意味をもちうるものでしかないからである。すなわちそれは、いわゆる自然主義的な世界のうちにではなく、志向的世界のなかでのみその意味を獲得できるようなものとして捉えられるのである。ちなみに、「身体的な主体」を軸に自身の哲学を展開したメルロ＝ポンティにおいては、〈動機づけ〉は「一種の作動的理由(raison opéronte)」(PP,61)として捉えられている。具体的に言えば、メルロ＝ポンティにおける〈動機づけ〉は、「或る現象が他の現象を発動させる場合、自然の出来事のあいだをつないでいるような或る客観的な効果によってではなく、その現象が提供する意味によって行われるものであって、そこに見られるのは、諸現象の流れを方向づけながらもそれらのどの一つにもあからさまに措定されることのないような存在理由、一種の作動的理由」(ibid.)とされるのである。

ころで「意志的な引き受け」(PP,202)、とも言っている。つまりメルロ＝ポンティにおいては、「生産諸力と生産諸形態との一つの対決」としての「経済」が歴史を動かす「推進力」あるいは「要因」となっていることは確かではあるが、それが一つの「歴史の要因」となりうるのは「人間の意識を経由して」(SNS,186）のことである、と見なされているのである。

前期メルロ＝ポンティにおける歴史理論もしくは政治理論をかたる上で、この「自覚（化)」という概念は「人間的な共存の体系」への〈組み入れ〉という意味において極めて重要な概念と位置づけることができる。たとえば、前期のメルロ＝ポンティにおいて「歴史の要因」の一つとして数えられる「階級」もまた、そのうちでの人間の「自覚化」がなければ「要因」にすらなりえないものである、とされる。「マルクスは、生産の循環過程における個人の位置ということで、階級の客観的定義を与えている。しかし彼は他方では、個人が自覚しない限り、階級は歴史と革命の決定的要因とはなりえないだろう、とも言っている。彼はさらに付け加えて、この自覚はそれ自身、社会的動機をもっているのだ、と言っている。してみれば、歴史の要因としての階級は、単なる客観的事実でもなければ、かといって孤独な意識によって任意に選び取られた単なる価値でもなく、いわば価値としての事実、受肉せる価値のごときものであり、その論理はこれから仕上げられなければならないのである」(SNS,139-140)。

とはいうものの、このような「歴史の実存的把握といえども、経済的状況からその動機づけとしての力を奪うものではない。実存とは人間が或る事実的状況を自分なりに捉え直し引き受ける不断の運動のことだとするならば、彼の思想のいかなるものも、彼の生きている歴史的文脈から、とりわけ彼の経済的状況から、まったく切り離されてしまうことはありえない」(PP, 201)、と言える。「経済が閉じた世界ではなく、歴史の深部で一切の動機づけが結び合わさっているからこそ、外面的なものは内面的なものとなり、内面的なものは外面的なものとなるのであって、われわれの実存のどのような分力も、けっして乗り越えられることはありえない」のである。すなわち、法律観、道徳、宗教、経済構造などはすべて「社会的事象の〈統一体〉」のなかで互いを「動機づけ」合い、また「意味し合う」関係にあるのであって、「どこで歴史の諸力がおわり、どこからわれわれの諸力がはじまるのかを語る」ことなどもはや不可能なことである。あえて言えば、「経済史」も「文化史」もまた、この「社会的実存の歴史という単一の歴史」を、各々が別々に「抽象的」なかたちで「表現(expression)」しているにすぎないのである、ということになろう。したがって、そういった意味からしても、メルロ＝ポンティにとってマルクス主義の「偉大さ」は、「経済を主要な原因ないしは唯一の原因として扱ったところにあるのではなく、むしろ文化史と経済史をただ一つの過程（「社会的実存の歴史という単一の歴史」）の抽象的な二面として扱ったところある」(SNS,189)、ということになる。そしてまた、最終的にメルロ＝ポンティの展開する「ある種の史的唯物論」もしくは「『広義』の史的唯物論」は、まさに以上のことを「完全に考慮に入れ」たものである、と見なされることになるのである。

注

本稿においては、メルロ＝ポンティの著作について以下のような略号を用いた。引用に際しては、文中で次の略号の後に原書頁（アラビア数字）を表記した。

[AD] *Les aventures de la dialectique* (Gallimard,1955)

[EP] *Eloge de la philosophie* (Gallimard,1953)

[HT] *Humanisme et terreur* (Gallimard,1947)

[MS] *Merleau-Ponty à la Sorbonne, résumé de cours 1949-1952* (1988)

[PP] *Phénoménologie de la perception* (Gallimard,1945)

[S] *Signes* (Gallimard,1960)

[SNS] *Sens et non-sens* (Gallimard,1946)

（にしむらたかひろ　神戸学院大学非常勤講師）

Transcender《une explication par le bas》
― Merleau-Ponty et《un certain matérialisme historique》 ―

Takahiro NISHIMURA

Maurice Merleau-Ponty (1908-1961) a été le témoin, par son expérience de la guerre, durant la Deuxième Guerre Mondiale, de l'incroyable puissance du hasard et de l'irrationalité dans l'histoire. Mais il dit qu'il est toujours nécessaire de rechercher dans cette histoire l'accomplissement de ces valeurs qu'on cultivait encore en 1939, la liberté, la vérité, le bonneur et la transparence dans les rapports entre les hommes.

Merleau-Ponty considérait dans sa première période que l'ordre des valeurs pénétre celui des faits, parce que l'accomplissement de l'humanisme historique (l'humanisme concret, qui tient ces deux ordres pour inséparables) rendait la chose possible.

Notre mission est de faire une lecture effective de l'histoire et du présent, aussi complète et fidèle que possible. Nous devons toujours choisir de transporter dans la lutte historique les valeurs que l'on défend.

Merleau-Ponty affirme que《l'idée d'une logique de l'histoire a pour conséquence inévitable un certain matérialisme historique》. En conséquence, dans sa première période, il essaie de placer au coeur de sa théorie historique un certain matérialisme historique, ou en tout cas la conception qu'il s'en fait, afin de trouver un appui plus solide que des principes toujours équivoques comme les idées ou la volonté indivituelle. Sa théorie historique est une théorie extrêmement humaniste comme le montre son《Feuerbach-Marx 1844》(Economie politique et Philosophie) et sa conception existentielle de l'histoire.

Dans cet article, conformément avec la conception de la motivation et l'idée de l'histoire sociale que se fait Merleau-Ponty, nous montons comme il a reinterprété le matérialisme historique en l'attachant à un principe d'explication par le bas, celui qui fait de l'infrastructure économique son unique causalit

「キーワード」
史的唯物論、実存、経済、メルロ＝ポンティ、人間